

## < 卒業論文要旨（昭和44年3月卒業性） >

### 日立市の発達過程と地域構造

石川良美

本論文の調査地域となっている日立市は関東平野と多賀山地の接触する関東北縁部に位置し、西部を多賀山地、東部を太平洋に区切られた南北に長い回廊的な地域である。この地域は日立鉦山、日立製作所を中核とした日本においても有数の重工業都市として発達してきている。かかる地域における研究の中心課題として、果して現在の如き重工業が起り得る基盤が存在していたのだろうかという素朴な疑問の上に立って、①工業都市形成の発達過程、②重工業の地域における展開と地域構造、特に「高度成長経済」下での地域構造の変化の考察という二点をかけ、これらの考察を通して日立地域の地域性の把握を試みた。論文の構成内容は次の如くである。

#### 第1章 地域の概説

(1)位置及び沿革 (2)地形及び地質 (3)気候 (4)人口 (5)交通 (6)鉦工業の成立条件

#### 第2章 日立製作所史

#### 第3章 発達過程（時代区分）

#### 第4章 地域構造

(1)鉦工業 (2)労働力 (3)商業 (4)農業 (5)都市化現象

#### 第5章 地域分化

以上、これを要約すると、この地域は明治38年に日立鉦山が開設されるまでは農業を基盤とした一寒村を呈していたにすぎず、日本の近代化の波もあまり被らずに旧態依然としていた。そこへ銅資源の存在に立地した鉦山都市が形成され、これを背景に鉦山修理工場として日立製作所が誕生し電気機械工業をこの地におこし、市場とは離れたこの地域の工業は日本の重工業化の進展と運命を共にし、戦時中には異常な程の発展を遂げた。そして、この地域における工業の優越性が確立され、その影響は農業を主とする産業構造の変化を促し、地域全体に及んだ。特に「高度成長経済」下では、産業間の格差が広がるばかりでなく、同産業中においても階層分化が進みつつあり、工業では日立製作所と下請中小工場群という厳然とした分化がみられ、農業は兼業化の進展に伴って益々工業への従属を強めている。又、工業化はこの地域に都市化現象をもたらし、工業地域の様相を形づくっている。以上の考察からは工業発達の積極的な要因を引き出す事は出来なかった。この地域にはむしろ、人的要因が大きく作用しているように思われ、親企業である日立製作所と下請中小企業間に尊敬の念のような伝統的精神が存在し、これが親企業と下請企業の一体化を促し、日立製作所は下請中小企業の存在を通じて地域全体を植民地とする王国を形成している。そして、この地域の存在は日立王国の存在によっているといえ、工業都市日立の歴史はとりも直さず日立製作所の歴史をたどる事になり、一巨大企業の支配に終始するこの地域は、

日本の工業地域の中でも特異な存在といえよう。

## 知多半島中南部の地理学的考察 特に地域構造について

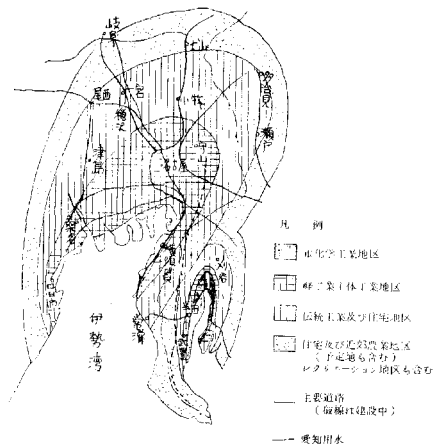
伊 東 洋 子

海上交通が主だった時代には半島は栄えたが、陸上交通が盛んになるにつれ、半島は停滞気味であった。それが近年の産業・経済の発展に伴ない新たに変容してきた。いかなる自然環境のもとに、いかなる特色があり、いかに変容し、いかなる地域構造を呈しているのかを知多半島について考察した。

fieldは知多半島の中南部、つまり名古屋市から約30～55kmにあり、行政区は半田市・常滑市・武豊町・美浜町・南知多町で面積計約200km<sup>2</sup>、人口計約20万である。

地形は丘陵性で北部は低く南部が高く(80～120m)40～50°の急傾斜で海浜に迫っている。小河川に沿って低地がほぼ東西にのびて開田されている。古い地層ほど南方に現われ新第三紀層の知多層群、常滑層群の上に第4紀層の武豊砂礫層が重なり、その上に海成・河成の段丘砂礫と沖積世の砂・礫・粘土などが不規則に重なっている。気候は暖流の影響で年平均気温は15°内外と比較的恵まれているが降水量は1500～1700mmで表日本式気候としては少なく、丘陵性の半島で河川が補流のため乏水性を帯び愛知用水通水(1961年)以前は水不足に悩まされた。愛知用水は農業用水を第一義としていたが本地域では上水道用水としての意義が大きい。

土地利用をみると河川の流域及び丘陵の谷間の沖積地に水田、段丘又は丘陵の中腹に畑と山林が散在し、近年衣浦湾沿岸に工場用地造成のための埋立地の増加、かつての桑園の果樹園への転換、又住宅地化等顕著な傾向がある。



圏構造の形成(図)

本地域において、その産業構造や人口の増減等から行政区画によって三地理区を仮設し、各地理区の特色 — 衣浦湾沿岸地区では繊維工業と醸造業、伊勢湾沿岸地区では製陶業、岬端地区ではみかん農業と漁業 — を考察すると「丘陵性の半島」という地理的条件が一因となって発展したことがわかる。最近の変容として衣浦湾沿岸の工業化 — 臨海工業地帯の立地 —、伊勢湾沿岸の都市化 — (名古屋南部臨海工業地帯の影響による)常滑市周辺の住宅地化 —、岬端地区の観光地化 — 農業・漁業と結合した観光業の発展 — があげられる。

ここで本地域の地域構造を考えてみると衣浦湾を中心とした圏構造 — 臨海部に重化学工業、その奥に軽工業・